

二人のシュヴァリエ

佐藤弓葛

クロノロジー的立場からみるならばパルニー «Chevalier de Parny» とシャトーブリアン «Chateaubriand: Chevalier de Combourg» とすべきであろうが、文学的名声からみるならば «Chateaubriand» と «Parny» とならべた方が妥当かも知れない。また私自身の研究としても Chateaubriand 研究が常に主となるので、後者の立場で論を進めて行くことにする。

Chateaubriand より 15 歳年上の Parny はブルボン島(現在のレユニオン島) 生れ(1753年2月6日)の貴族出の créole で、通常 Chevalier de Parny と呼ばれ、後に Vicomte になる。本名は Evariste-Désiré de Forges¹⁾ de Parny である。一方 Chateaubriand はブルターニュ生れの貴族出で Chevalier de Combourg と言われ、後に同じく Vicomte になる。

Parny は9歳の時フランス本国で教育を修めるため、ブルターニュの首都レンヌの collège に送られた。Chateaubriand も13歳の時同じ学校に入り偶然 Parny が昔いた部屋に入り、彼のベッドを引継いでいる。

Parny は最初僧侶になろうとして、一時 Monastère Saint-Firmin に入った。Chateaubriand も僧侶になろうとした。しかし二人とも僧侶になることはあきらめ軍人になる。Parny は龍騎兵大尉になり、パリーに出て、文人の社交界で名をあげる。Chateaubriand も Navarre 聯隊の少尉の肩書を得て、パリーに出て、文人の社交界に出入するようになり、Parny を知るようになる。共に18世紀末の軍規の乱れた暇な軍人で、文学を楽しむ輩である。

Parny は既に «Poésies érotiques» を発表し、当時の élégies 詩人として第一級であり、Chateaubriand は Parny の élégies が大好きで暗誦していた。二人のめぐり合は二人を急速に親密にした。Parny も Chateaubriand も大革命をさけた。

Parny は海軍に入り世界を旅する。Chateaubriand はアメリカ大陸に行き、

未開人とその *exotisme* を発見する。その後 Chateaubriand はイギリスに 8 年滞在し、「革命試論」《*Essai sur les révolutions*》を書き、その中で Parny の *élégies* をたたえる。

ここ迄の二人の間は友人関係であったが、その後二人の歩みは全く正反対になる。それはまさに 18 世紀と 19 世紀の対決、あるいは別離と言う大きな問題とも言える。

Voltaire の弟子 Parny は「神々の戦」《*La Guerre des Dieux*》という作品で 18 世紀の反キリスト教的思想を固執したが、Chateaubriand は Parny の「神々の戦」に対する反論として「キリスト教精髓」《*Le Génie du Christianisme*》を発表し、18 世紀の思想を乗り越え、19 世紀フランス・ロマン主義の先駆者になった。

こうした二人の関係を Chateaubriand の作品に出てくる Parny を基盤にして逐一検討してみようと思う。

— 1 —

《*Mémoires d'Outre-Tombe*》の第 1 部第 2 巻第 7 章 (Pléiade 版 tome I の 68 頁)。

「M. de Fayolle がレンヌの学校の校長であった。ブルターニュのこのオラトリアン派の学校で教鞭をとられる三人の著名な先生がいた。第 2 学級の de Chateaugiron 師、修辞学の Germé 師、物理学の Marchand 師であった。すこし前にこの学校を出た Geoffroy と Ginguéné は(パリーの) Sainte-Barbe と Plessis 学校に名声を与えたであろう。Chevalier de Parny もまたレンヌで勉強したのであった。私は私に当てられた部屋で彼のベッドを受けついで。

レンヌは私には一つの Babylone (巨大都市)に思えた。学校は一つの世界のように、先生も生徒も大変多く、校舎、校庭、散歩道の立派なことは私には驚きであった。」

《*Mémoires de ma vie*》(Levaillant 版 86 頁) の第 2 の巻にも同じくだりがあるが、Parny のところで次の一行が余分に記されている。

「...かなり奇妙なことが一つある。それは私に当てられた部屋で彼のベッドを私が受けついでたことである。」

《*Mémoires d'Outre-Tombe*》の文章は 1813 年 12 月の末 Vallée-aux-Loups にて、となっている。Chateaubriand 45 歳の時で、Napoléon 帝政崩壊の前年

であり、また Parny の死ぬ前年でもある。1813年の筆とはいえ発表されたのは Chateaubriand の死後、即ち1848年10月からであるから、文章は吟味され、無駄な言葉は削除されている。1826年の原稿による《Mémoires de ma vie》の文章の方には手を入れない若さがみられる。即ち上記の余分な一行《une chose assez singulière, c'est que le chevalier de Parny . . .》とか文頭の《M. de Fayolle était (alors) principal》の alors 削除をみればわかる。

《Une chose assez singulière》なる言葉のある方が真実性をますか、無い方がいいのかはとにかくとして、双方の《Mémoires》にベッドの件が記録されているからには、やはりそうした事実或いはそれに近い事実があったことであろう。

Parny がレンヌのオラトリアン派経営の学校に入学したのは1762年9歳の時であり、Chateaubriand が入学したのはそれから11年後の1781年であるから勿論 Chateaubriand 自身が当時 Parny のことを知っている筈はない、後に彼がパリーで Parny と知り合い色々話しているうちに偶然知ったので、同じベッドかどうかはさだかでないにしても、同じ学校同じ部屋だけでも《Une chose assez singulière》であったことは確かである。

この様に Chateaubriand の《Mémoires》を読む時には常に時の持続性(durée)と時の積重なり(entassement)を念頭に置いてかかる必要がある。回想録というものは大体そうであるが、Chateaubriand の場合はそれがまた特殊で、時の entassement が何度もあり、まるでプリズムを通したような色々な色彩を放つので、彼の作品は史実性よりも芸術性が強くなっている。だからといって史実性を創作しているようにも思えない。

Parny はレンヌの Collège で優秀な成績をおさめたが、学校の思い出は極めて悪く、友人への書翰詩によると学校は彼にとって獄舎(cachot)であり、手に鞭を持ちごてごて文句を述べる監督は物事を考えさせるように話さない、そして名も知られてないつまらぬ木の名を教える我慢ならない所であったらしい。

Potez は《L'élégie en France》の中で「学校での唯一の慰めは友人に Ginguéné がいた」ことであったと書いているが、5歳年上の Ginguéné と Parny が学校でどの程度親しかったかは余りわかっていないが、成人してからの二人は最後まで親しかった。また Ginguéné は Décade 誌で活躍し、Parny 同様18世紀的思想を守り後輩で同郷人たる Chateaubriand の《Le Génie du Christianisme》を反撃している。

《Mémoires d'Outre-Tombe》の第1部第4巻第12章 (Pléiade 版 tome 1 の139頁)。

「第12章 1821年6月パリにて
文人達 - - 肖像画

私のパリ滞在から三部会の開始までの2年間の間に文人達の社交界は拡大した。私は Chevalier de Parny のエレジーを暗誦することが出来た。今でも覚えている。私は自分が愛読している作品をかいた詩人に会うために手紙を書いた。彼は私に丁寧な返事をくれた。そこで rue de Cléry²⁾ にある彼の家を訪ねた。

私はまだかなり若い、声の非常によい、背の高いやせた人を見た。顔には疱瘡のあとがあった。彼は私の家にも来てくれたので私は姉達に紹介した。彼は社交界を好まず、やがて政治のために社交界から追い出された。彼は当時旧派に属していた。私は彼の作品にこれより似ている作家は知らなかった。即ち詩人にして植民地出の白人 (créole)。彼にはインドの空と泉と棕櫚と一人の女だけが必要であった。彼は騒ぎを恐れて、人々に気づかれない生活にもぐり込んでいるように努めていた。すべてを自分の怠惰にまかせ、自分の暗い生活の中で時たま立琴にふれる楽しみによってしか現れなかった。

『たのしい幸せな我等の人生は
愛の翼のもとで秘かに流れんことを、
小川の様にかすかにさざ波の聞こえる
河床でその流れをひきしめ、
心して茂みの木かげを求め、
曠野には殊更出ようとはせず。』

Chevalier de Parny を気性の激しい貴族から惨めな革命論者にした彼の怠惰な性格からぬけ出す事は不可能である。いためつけられた宗教を攻撃し、僧侶達を絞首台に送り、自分のはのほほんと暮らしている。」

Chateaubriand がここに引用した Parny の詩は《Poésies érotiques》の第2の巻の最後の「和解」《Le raccommodement》から引用したものだが、1行目はテキストと違う。

《Que notre vie heureuse et fortunée》はテキストでは、《Que notre vie obscure et solitaire》(暗い孤独な我等が人生は)となっている。

Chateaubriand の改作とみられるが、二つの vers の意味は余りにかけ離れているので聊か戸惑いを感じる。

さて、引用した文章全体から感じとれる Parny に対する Chateaubriand の

批判は決して好意的とはいえない。特に引用した詩句に続く後の文章には自分が愛読した先輩詩人に対する厳しい批判がみられる。それは後述する「革命試論」に見られる Parny や《Mélanges Littéraires》「文学雑記」中の Young 論のなかにみられる Parny の項と比較すればはっきりわかる。

ここで Parny の *élégies* について少し語ろう。Parny は 19 歳で軍隊入りし、「12 人青年将校グループ」を作り、彼等で勝手に兵舎の規則を作った。青年貴族ばかりで最年長者が 25 歳になっていなかった彼等は音楽や詩歌を愛し、よく飲み、女遊びも恋愛も盛んであった。黄昏にはサン・ジェルマンの森の道を逍遙し、日没の美しい景色を贅え、夜になると大変楽しい夜会に出掛ける。まるで Watteau の絵にみられる《Fêtes galantes》を地で行っている様な生活であった。とはいっても、それを描いた Parny の作品《Journée Champêtre》(1788 年)には 18 世紀的な何にか精神的深みのない、男女の本能にまかせる遊びが強かった。1773 年 (20 歳) に彼は島に帰るよう父に呼び戻された。島の生活は華やかなパリーの生活とは余りにかけ離れた退屈きまりないものであった。しかしこの時彼はひとりの乙女に音楽を教えることになった。Esther

Lilière という créole 女性で 13 歳であるが、植民地の早熟な環境にあるため、Parny との関係が深まり肉体的交渉まで持つようになった。父は二人の愛を認めるどころか大いに怒り結婚も許さず二人の仲を引裂いた。この乙女との恋愛を *élégies* にしたのが有名な《Poésies érotiques》であり、主人公たる乙女は Eléonore という名で呼ばれている。

《Poésies érotiques》という表題は如何にも 18 世紀流の呼び方であるが、最後の第 4 の巻は *élégies* のみを 14 詩まとめ終っている。その作品全体の内容からみても *élégies* といった方がふさわしいものである。Chateaubriand は Parny の詩を《Poésies érotiques》と呼ぶのを好まなかった。Sainte-Beuve も《Poésies érotiques》というタイトルは「いやらしい表題だ、私は *Elégies* の方を選ぶ」といつている。その各々の詩の感じのよさ、さわやかさ、優雅さ、調和、いつわらざる感情の発露を見れば、フランスの *élégies* 詩人として第一級のものであるといえよう。Voltaire は死の床において Parny を《mon cher Tibulle》と呼んでいる。詩人 Lebrun は彼を *demi-Tibulle* と呼んでいる。Chateaubriand も「革命試論」の中で彼のことを *Tibulle de la France* と記している。

さて、節操のない Parny は数々の過ちを犯して数年をすごした後、再びフラ

ンス本国に帰った。そして Parny が 1778 年に出した詩集《Poésies érotiques》は巻の 1, 2, 3 までである。最後の第 4 の巻《Élégies》の部分はそれから 3 年経た 1781 年である。彼は第 3 の巻を出した後、再び 1779 年にブルボン島に戻ったが、Eléonore が結婚したことを知らされ、失意のどん底におち、再びフランスに帰りパリーで女王軍の龍騎兵大尉になる。第 3 の巻まで発表し、大衆が Eléonore に興味を抱くようになってから、Parny は詩集の統一をはかることに努め、作品は純化される。無節操への弁明や結婚に対する冗談は次第にかけをひそめ、Euphrosine や Aglaé に対する恋歌は省かれる。第 4 の巻までの詩集で作品は見事な愛の物語史になっている。即ち第 1 の巻は二人の関係の出だしを唱い、それから生ずる Volupté に進む、第 2 の巻は人々の偽りの警鐘、第 3 は Volupté の再生、第 4 は危機・分裂・絶望となり、第 1 の巻と第 3、第 2 の巻と第 4 で組をなし、愛の物語りは進む。そしてドラマが進むにつれて生気がみられ情熱的となり、作品の密度の濃さが読みとれ、読者の心を動かす。Parny が表題を《Poésies érotiques》としたのは前に 18 世紀的と私は述べた。18 世紀は Duclos や Crébillon fils の小説が喜ばれ、清純な恋愛詩の生れない時代であった。詩人として活躍した Bernis, Dorat, Gentil-Bernard, Boufflers, Chaulieu 等は無節操の擁護弁解を歌い、自分が征服した女性のリストを発表したりして、およそ真剣なものがないし、深い感情や気高い形式の望めない所謂 *poème léger* が喜ばれ流行した時代である。従って Parny もそうした大衆に受ける表題をつけた詩集を発表することを願ったとみてよいであろう。1778 年最初に発表した《Poésies érotiques》即ち詩人がまだ作品の統一に意を向けず Euphrosine や Aglaé の恋歌をのせ第 3 の巻までの作品を見れば表題の選択も納得出来よう。

また Parny 自身本質的には volupté の詩人である。volupté の分析には執ように食いさがる。しかし彼はまた他の詩人にみられない新鮮な官能の持主であり、閨房や舞台裏で悪ふざけを楽しむ愛を描くのではなく、熱帯の自然の中で原始的な新鮮みをもった、むしろ健全な volupté の発散を素直に描いている。同時代の詩人達が歌う人為的な *amours capricieuses* と全く異なる点が見られるのである。Chateaubriand が Parny の作品を暗誦する程好んだのもその点にひかれたからであろう。Chateaubriand が初期の詩集をまとめて発表した《Tableaux de la Nature》のなかでは恋愛こそ読まれていないが、その幾篇かには明らかに Parny の影響が感じられる。

《Poésies érotiques》の中から美しい *élégies* を若干挙げるとすれば巻の 1

の《Le Lendemain, La Discretion, La Frayeur, Fragment d'Alcée, Plan d'Etudes, Projet de Solitude》。巻の2の《La Rechûte, Retour à Eléonore》。巻の3の《Les Serments, Souvenir, Ma Retraite, Au Gazon foulé par Eléonore, Délire》。巻の4の Elégies V, VI, IX, XII, XIII 等で、そこに描かれた美しい詩句は人の心をひきつけるものである。

ちなみに詩集の最初の《Le Lendemain》だけを訳してみよう。

翌 日

エレオノールに

とうとう、いとしい僕のエレオノール
君は望みながらも恐れていた
あんなにも楽しいあの過ちを知ってしまった。
それを味いながらまだそれを恐れていた。
よろしい。言い給え、一体何をそんなにこわがるのか。
過ちの後で君の心の中に何が残るのか。
軽い心の乱れ、あまい思い出
新しい情火の驚き
あわい悔恨、とりわけある欲望
既にバラは君の白百合の顔のはだに
花の輝かしい色彩を混ぜた
君の美しい瞳の中にはうぶな恥じらいに続いて
ゆるんだものういさまがおきる。
それは僕達を魔法にかける快樂の
前兆であり、また結果でもある。
君の胸は静かに乱れ
はじらいはすくなくなり
母の手で作られた
薄い下着を押しやる。
やさしい愛の手は
下着をつつしみもなく、一層なれなれしく
自分で乱すことも出来よう。
心地よい夢想はついに
この快感、この刺激的な
軽率な行為(行爲)にとってかわる。
それらは君の愛人を失望させた。
そして、もっとやさしい君の心は
こだわりもなくやさしい
ものういかん味な感情にしたる。

あゝ、あの哀れな口やかまし屋達に
 僕達の苦しみに対する唯一の救いを
 許し難い罪だと呼ばせるにまかせよう。
 この純粹な楽しみ、慈愛にみちた神様は
 その芽をすべての人の心の中においたのだ。
 彼等の悪口を信じ給うな
 彼等の偽善的な嫉妬深いわめきは
 自然にそむくものである。
 いな、罪はそんなに甘いものではない。
 («Poésies érotiques» 卷の1の1)

— 3 —

Sainte-Beuve の «Chateaubriand et son groupe littéraire sous l'Empire»
 「シャトーブリアンと帝政下における彼の文学グループ」より、第1巻の89頁
 の註**の箇所——。

** Parny に関して、明らかに Chateaubriand は今私が目にしている次のノート³⁾を1798年に書いていた。それは9年か10年以前も前に彼等の関係の確かな度合を判断することを我々に許すものである。

「Chevalier de Parny は大きく、瘦せていて、髪は褐色で、黒目がひっこんでいて、非常に生々している。我々は交合していた。彼の会話にはやさしみが無い。或る晩我々は6時間一緒にすごした。そして彼は私に Eléonore について話した。彼がブルボン島を去ろうとしている時、彼の最後の旅の時で Eléonore は彼のもとに一人の黒人女をよこし、彼女に会いに来てくれるように頼んだ。その黒人女は二人のかつての甘いあいびきに彼を導いた同じ女であった。Parny をヨーロッパに運ぶ船は錨をおろしていた。彼は夜中に出発しなければならなかった。12年間の沈黙の後あの黒人女によって出発直前に手渡された使い文を彼が受取った時、Eléonore の恋人が味ったにちがいない感情を判断しなければならない。何たる思い出よ、Eléonore はブロンドであった、かなり大きく、美人ではないが魅力的で愛欲をそそるものであった。要するに彼は私に言った。Saint-Pierre によって «Paul et Virginie» の中に描かれている景色はうそであると。しかし Parny は Bernardin をうらやましがっていた。」

「Fontanes は非常に陽気な食事を私にしてくれた。我々は会食者として、私と Ginguéné, Flins, Chevalier de Parny であった。若者のパーティには最早行かないと主張していた La Harpe は妻君をよこした。Fontanes の恋人で女流詩人の M^{me} de F.⁴⁾ もいた。そして最もフランス人らしくあることは良人がそこに一緒にいて、しかもその良人が何も感じないことである。皆親しく、酒は上等、詩人すぎることもなく、さりとて全く詩人でないと言うのでもなかった。」

はじめに出てくるノートとは《Exemplaire confidentiel de l'Essai sur les révolutions》のことである。これは Chateaubriand が最初にロンドンで発表した「革命試論」の一冊を手許におき、その余白に自分の手でその後、書きためたものである。それを Chateaubriand が全集を出版する際に出版人 J.-B. Soulié に手渡した。そしてその後 Aimé Martin, Tripiier の手を経て 1854 年に Sainte-Beuve が手に入れたものである。Sainte-Beuve はその余白の手記に大変興味をおぼえ、意地悪くも Confidentiel と名づけ 1854 年 4 月 17 日の《Causeries du Lundi》で Chateaubriand の「キリスト教精髄」記念祭の際、その余白に書かれた手記を公表し Chateaubriand のキリスト教に対する不信の念のスッパ抜きを試みた。例えば余白に Chateaubriand みづから記した言葉が見出される。「神と物質と宿命はまさに一つを形成するものである。…これが私の体系である。私の信条である。然り、この世ではすべてが機会、偶然、宿命なのだ。」「もう誰れもキリスト教の学説など信じていないのだ。…」

Sainte-Beuve は鬼の首を取ったように得意になって、こうした言葉を引用し Chateaubriand の弱点をスッパ抜いている。この《Exemplaire confidentiel》は Sainte-Beuve の死後、廻り廻って Chateaubriand 家の後裔 M^{me} de Contesse de Durfort の手に入り、今では Chalvet 氏が所有している。

Sainte-Beuve が Chateaubriand の《Mémoires d'Outre-Tombe》に書かれている Parny 論に対し不満をもち《Exemplaire confidentiel》の余白にかかっている Parny を《Chateaubriand et son groupe littéraire sous l'Empire》で取り上げ Chateaubriand の旧友先輩に対する手きびしい批判を非難するのはよくわかる。しかし現在フランス文学史を遡り、18 世紀後半の詩人・哲学者を調べ、その地位においてみると Chateaubriand の批評が正当であることが明らかにわかるから、Sainte-Beuve が Chateaubriand を非難しているのが必ずしも正しいとはいえない。むしろ Proust が《Contre Sainte-Beuve》で言っているような Sainte-Beuve の大家に対する jalousie による偏見とみた方がいいであろう。《Exemplaire confidentiel》を「キリスト教精髄」の記念祭に発表するやり方にもそうした面が現れているともいえよう。

— 4 —

「革命試論」(1797 年)の第 1 巻第 22 章 Parny の《Délire》引用の項。

「ミトラレーヌ。(レスボス島)のミューズのこの断篇に対してフランスが生みだ

した (A) 唯一のエレジー詩人の一節を書いてみよう、国民のムルスはしばしば哲学の書におけると同じように愛のソネテの中でもよく描かれている。

あの快楽(25)の時はすぎ去った。
 その早さが私の欲望を裏切った
 すぎ去った私の若いやさしい友よ
 君の喜びは私の幸を倍にした。
 悩みに沈んだ君の瞳を開き給え
 そして口付けが君の生命を生きかえさせるように。

.....
 エレオノール、幸なる恋人よ、
 わたくしの腕の中に永遠にとどまれ

.....
 すべてを許し給え、そして一切抵抗しなさんな
 エレオノールよ、愛は私の共犯者だ
 私の体は君の体に近づいておののく、
 更に近づき、うっとりして私は感じる
 君の燃える胸が私の胸の下でドキドキしているのを
 ああ、私が激しく興奮している時に
 君の濡れた唇の上で私に愛を飲ませ給え、
 然り、君の息使いは私の心の中に流れた
 君の息使いは愛の喜びの炎をもたらす
 私の甘い激しさの素晴らしい宝
 この口付けの中で私の魂のすべてを受け給え (B)

私はフランスの Tibulle か Phaon の恋人のいずれがよりすぐれた筆力で情熱を描いたかを決めるのは読者諸君にまかせる。二人の詩人とも彼等の生れた (C) あの太陽の炎を自分達の詩の中に走らせているように思える。」

原註 (A) 私は Chevalier de Bertin についても M. Lebrun についても語っているのではない。Lebrun のエレジーは私がフランスを去る時にはまだ出版されていなかった。私はそのエレジーがその後出版されたかどうかは知らない*。

(B) Chevalier de Parny の作品 tome 1. Poésies érotiques Livre III. p. 86.

(C) M. de Parny はブルボン島で生れた。

* Lebrun は死んだ、彼のエレジーは Ginguéné 氏によって出版された (N. Ed.)

Chateaubriand は「革命試論」の中のこの章でギリシヤの詩人達とフランス

の詩人達の比較をしている。Anacréon の Odes と Voltaire の Stances sur la vieillesse, Simonide とフランスの Simonide といわれる Fontanes との比較、Sapho と Parny を比較してフランスが決してギリシヤに劣ってないことを証明しようと努めている。

Parny の《Délire》から引用しているのは最初の1-6行までと、27-28行と45-55行の箇所である。Chateaubriand は Parny の作品を高く評価しているが不思議なことにフランスの Tibulle と呼ぶだけで、Parny の名は註2と3にしか出していない。しかも唯一のエレジーの詩人といっている註1で Bertin や Lebrun のことを語っているのではない、とことわっているのは何故なのか、Parny の「神々の戦」に関連があるのかも知れない。

この《Délire》も Chateaubriand が引用している処だけを読むと割合に素直で心情の吐露も美しく思えるが、詩全体を読むと気品の欠けた volupté の強い18世紀的なものになっている。

— 5 —

Chateaubriand 全集第8巻《Mélanges littéraires》「文学雑記」中の「Young 論」より。

「M. de Parny はまた別の種類の感情の中に思い出のやさしい魅力を入れさせることが出来た。エンマの墓に対する彼の嘆き《Complainte》「哀歌」はフランスの唯一の哀愁詩人の文章を特色付けるあのやさしいメランコリーに満ちている。

友情さえ、そうだ移り気な友情は
はしゃぐ陽気さを思い出した。
それは瀕死のエンマのイメージを追いやった
その偽りの悲しみは一瞬しか続かなかった。
美しきエンマよ、若く忠実な友よ
君の思い出はもはやこの場に生きていない。
人々は墓から目をそらす
君の名は消え世間は君を忘れる。

エレノールの歌人のミュージズはヴィルジニイ を乗せた船が遠ざかって行くのを両手で顔を支えながら、ボールが眺めているその同じ岩の上で歌人の夢を育てたのであった。」

ここに引用されている Parny の詩は《Mélanges》の第11番目の詩《Complainte》からである。最後の文章は《Paul et Virginie》の作者 B. de Saint-

Pierre と Parny が同じ島の出身であることを述べている。

Chateaubriand が「Young 論」の中に何故 Parny を引用したか、というのは「夜」の詩で有名な Young には tendresse というものが欠けている。そのため人々に真の感動を与えることが出来ない。Young の感情は常に反省や合理性に変わる。彼は美文調で唱い立琴をかなでるが、その感情には自然さが全くない。それは Virgile の自然美や調和の美と比較すれば容易にわかることである。更に Parny の詩と比較してもほんとの Complainte なるものが如何なるものであるか理解出来るであろうと言う証明のために引用したのである。

Parny の《Mélanges》は《Poésies érotiques》に続いて発表されたもので、この詩に対する Chateaubriand の気持は Parny に大変好意的である。それは「彼の哀歌はフランスの唯一の哀愁詩人…」と言う言葉にも、またそれに続く「哀愁詩人の文章を特色付けるあのやさしいメランコリーに満ちている」という文章にも明らかに現れている。

Chateaubriand が引用した詩の 5 行目は原文と違っている。

《Charmante Emma, jeune et constante amie》は原文では次のようになっている。

《Sensible Emma, douce et constante amie》

Chateaubriand が 1790 年 (21 歳) 《Almanach des Muses》「詩神年鑑」誌に生涯ではじめて発表した《Amour de la compagne》「田園への愛」にも Parny の《Complainte》の影が感じられるような数行がある。当時は Chateaubriand がパリーに出て、Parny に近づき、彼の詩を愛誦していた時である。ただし Chateaubriand の韻文には女性は存在しない。手に一冊の Tibulle を持って、みどりの野や谷間を歩き、流れを眺めながらつぶやく状景である。

《私はここで私の生涯を終えたい
墓地の闇に戻った静かで
孤独なわたしの亡霊は
森の中で憩いを求めるであろう。
偉大なものの数多くある世の中で
私の名は栄光もなく消えうせるであろう。》

— 6 —

Chateaubriand の全集第 22 卷《Mélanges et Poésies》「雑論と詩歌」の《Tableaux de la Nature》「風景画」に関する序文の中。

「第9の風景画が1790年の『詩神年鑑』に挿入された。それは私がそれに当てた Chevalier de*** による『田園への愛』と言う表現のもとに205頁に現れた。Ginguéné, Lebrun, Chamfort, Parny, Flins, La Harpe, Fontanes の社交界でそれについて語られた。私は彼等と多かれ少なかれ近い関係をもっていた。「詩神年鑑」で夜の集いをするには時期が悪かった。既に革命のさ中であつた。そして名声を得るには最早4行詩では駄目であつた。」

Chateaubriand の全集第22巻の《Mélanges et Poésies》が出版されたのは1828年(60歳)で、その時 Chateaubriand は15歳から20歳までの詩を集めて《Tableaux de la Nature》という表題をつけ、それに序文をつけた。60歳の彼は若い時の自分の詩集を出版するに当って、パリーに出て来て当時パリーの文芸社会を支配していた詩人達の愛顧を受けたことを思い出しながら序文を書いている。特に彼が好きであつた Parny との親しさは既に挙げた —3— の Sainte-Beuve の註を読めばわかる。ちなみにこの Chateaubriand の処女作「田園への愛」は Delisle de Sales の庇護のもとに発表されたものである。

— 7 —

《Mémoires d'Outre-Tombe》第1部第5巻第15章の Parny の《Sur la mort d'une jeune fille》「ある乙女の死について」より引用 (Pléiade 版 tome 1 の186頁)。

「M^{me} de Villette はまだ美しかったが、この母よりも更に美しかった16歳になる娘を亡くした。その娘のために Chevalier de Parny はギリシアの Anthologie に匹敵する次の詩を作った。

彼女は天に生命(%)を返した
そして静かに眠った。
運命に対し不服も言わず
かくして微笑は消える。
森の中で一羽の鳥の歌は
かくして跡も残さず死ぬ

ルーアンに駐在した我が隊はかなり
遅くまでその規則を保っていた。」

これは1821年12月パリーでの回想録である。1789年の大革命勃発の騒ぎの時期を描いている。Chateaubriand は7月 Fédération には出席せず、大衆の中でひとり孤独を守っていた。それでも Salon には出入りし、新しい知り

合いを作った。M^{me} de Villette は Voltaire が可愛がっていた姪であった。Voltaire 自身 1778 年にこの館で死んでいる。Voltaire の秘蔵弟子 Parny が M^{me} de Villette の不幸を慰めるために一詩を捧げた。

Chateaubriand は終りの 6 行だけを引用したのであるが、その前に次の 8 行がある。即ち

「彼女の年は少女時代から脱け出していた。
無邪気で愛らしい
彼女は愛の女神の顔だちをしていた
何ヶ月か何日かはなお
この清純な素直な心の中で
愛の感情が花さくところであった。
しかし天は彼女のうら若き魅力を死を
もって処罪した
彼女は天に・・・」

Chateaubriand は Parny のこの詩をギリシヤの Anthologie に比較して称えているが、Sainte-Beuve もこれこそ墓碑に銘記する現代の傑作であると述べている。我々の心に訴える簡潔さ、説明を要しない名句であるとして Lamartine の《Premier regret》や V. Hugo の《Les Fantômes》と比較しても、Parny のこの *élégie* の方が若人の心をとらえることを説明している。Chateaubriand にも時代はずっとさがるが (1832 年)、ある乙女の死に関する *élégie* 《Jeune fille et jeune fleur》「乙女と新鮮な花」という大変美しい一篇がある。

— 8 —

《Mémoires d'Outre-Tombe》の第 3 部第 30 卷第 2 章 (Pléiade 版の tome II の 225 頁) 再び Parny の《Complainte》より引用、従って「Young 論」の引用文と重なっている。

「気高きクララよ、立派な忠実な友よ
君の思い出はもはやこの場に生きていない。
人々は墓から目をそらす
君の名は消え、世間は君を忘れる。

私が Duras 夫人から貰った最後の便りは我々をすべて汲みつくす生命の最後の一滴の苦しみを感じさせる。」

Chateaubriand は余程この *élégie* が好きであったから二度も引用したので

あろう。しかしここでも冒頭の1行は書き変えている。

《Sensible Emma, douce et constante amie》を《Noble Clara, digne et constante amie》と変え、Parny の名を全然あげず、まるで自作のように Duchesse de Duras 夫人の死を悼んで書いている。

— 9 —

消されたノート

《Génie du Christianisme》の第2部「キリスト教詩学」第4巻の第2章の最終の項。

「要するに物質的な寓喩即ち寓話の神々が自然の魅力を破壊したこと、及び古代人が叙景的な詩をもたなかったという理由で、真の風景描写をなし得なかったことは明らかな事実である。さて偶像崇拜の別の人民で神話的形式を知らなかったが、この叙景詩を多少心得ていた。サンスクリットの詩、アラビアの物語、『エッダ』、黒人及び未開人の歌はこれを証明している (a)。しかし異端の徒はその作品へ常に誤った宗教を、従って悪い趣味を混ぜ合せたから、自然を真実の姿に描くことはキリスト教の時代になって初めて知られたことである。」

註 (a) 卷末のノート D を参照せよ。

このノート D にサンスクリットの詩「サコンターラ」と北部スコットランドの詩「吟遊詩人の歌」(オシアン)を挙げているが、黒人及び未開人の歌は挙げていない。しかしここに「キリスト教精髓」の初版では Parny の《Chansons Nègres ou Madécasses》「黒人のシャンソン即ちマダカスカルの歌」の一部が引用されていたのに Chateaubriand はその後それを削除してしまった。

Chateaubriand が Parny の《Chansons Nègres ou Madécasses》を如何に好んでいたかは、その投影が明らかに《Atala》に見られると私には思える。Chateaubriand と Parny の未開人の愛のポーズは実によく似ている。第2の歌マダカスカルのアンパニ酋長が客人をもてなすために美しい娘ネエラを供するくんだりにはナツクスエ族の女やアタラの姿を思い出させる。更にマダカスカルの勇者の姿には《Les Martyrs》にみられるフランク族の勇者を称える状景も感じられる。また第6の歌に出てくる若き囚れびとヴァイナにはアタラの恋人青年シャクタスの姿が見られる。第10の歌にも《Les Martyrs》が感じられる。もっとも、そこに見られる volupteuse な面は Parny 独特のものであり、18世紀的であり、そのために却ってクライマックスの荘重さを半減させてしまっているのは残念であるが。次の手紙でも解る如くキリスト教冒瀆の詩人

Parny の「神々の戦」の反論として書いた「キリスト教精髄」の中で Parny の作品を称えたのではまずいと思って削除したのであろうか？

— 10 —

Chateaubriand の Baudus⁵⁾ 宛書翰 1799 年 5 月 6 日付。

「…問題は二つなのです即ち Fauche⁶⁾ のために翻訳計画と『ポエジーに関するキリスト教について』の小作品なのであります。この作品は Fontanes の願いによって始められた状況の作品であり、また我々の昔の友人で最近全く無軌道にみづからの名誉を汚したあわれな Parny の詩に対する一種の返答であります。私はこの小冊子が販売で失敗するようなことはないと思います。」

Chateaubriand は 1797 年「革命試論」をロンドンで発表し、パリにいる旧友先輩である La Harpe, Ginguené, Delisle de Sales に献呈している。それは彼の革命に対する思想が彼等と共通するものと思って送ったのである。先輩達は皆 Voltaire, Diderot の思想を忠実に継承しているので、「革命試論」までの Chateaubriand の思想を同じ傾向のものとするべきである。即ち Sainte-Beuve が《Exemplaire confidentiel》の余白から引用した「神と物質と宿命はまさに一つを形成する…」「誰れもキリスト教の学説など信じていないだろう…」という文章にかいま見られる 18 世紀末のフランス人一般の思想である。しかし Chateaubriand は青年の大胆さで書いたこの消化されていないが野心と生気に満ちあふれ、また博識だが混乱矛盾の見られる「革命試論」の中で、ギリシヤ・ラテンの革命からフランス大革命迄の歴史の動きを比較検討した結果、彼が得たものは一つの疑惑であった。それは革命必ずしも時代の繁栄に寄与するものであろうか、またキリスト教が減びてもそれに代りそれよりまさる宗教がはたしてこの世に存在するであろうかと言う疑惑で作品を世に問うている。

要するに Chateaubriand が自分の身につけていた 18 世紀的なものをすべてそこに投げ出して見て総決算をしたのである。そして彼の心に残されたものはコンブールの森で育ち、アメリカ大陸で体験した自然への憧憬と信仰心の強い母から受けたカトリック精神であった。大革命の惨状後キリスト教に代る宗教がないとしたならば Chateaubriand の精神的苦悩は解決出来ない。その時革命前にフランスで知り合いその後イギリス亡命中特に親しくなった Fontanes のキリスト教なくして欧州の安定はあり得ないという強い信念にひかれて、キリスト教に見られる詩的美・芸術美を研究するようになった。その頃はからず

も信仰心の厚い母の死とそれに続く姉の死が彼に完全なる改宗を与えた。「私の信仰心は心から出た。私は泣いた、そして私は信じた」という有名な言葉が生まれた。

1799年の2月から3月にかけて Parny の「神々の戦」が *Décade* 誌に発表された。(もっともその断篇は1795年から出ている。) Voltaire の《*Pucelle*》をまねた「背教と腐敗猥せつが産み出した最も反抗的な最も怪物的な詩」だと M. de Féletz は決めつけている。

「神々の戦」は10からなる詩歌で出来ている。先ず作者が部屋で夜眠りにつく前穏やかな気持で、けしの花を見ながら少し考え事にふけていると突然稲妻が光り、大気が何とも言えない香りにみたされると、美しい鳩が一羽目の前に現れ、古代とフランスの信仰について書けと命じる。作者は詩も散文もすてたので書けないと答えると、鳩が手助けをするからただ書取ればよいといわれこの作品を書いたので、大胆な不合理な点があっても作者の誤りではないと、弁明しながら物語りに移る。Parny は冒頭でこのような逃げの手を打っている。

ギリシャの神 Jupiter が彼の祭日を祝うため神々を招き豪華な会食をする。その時天の周囲に数千の外国人が滑り込んで来たこと知らされ、それを確かめに *Mercure* 神が派遣される。それがキリスト教徒といわれる他の神々であることを知り、ひとつこの新参者達を招いてみようとする。ギリシャの神々はかなりあくどい親しみをもって接する。そのうち双方の間に争がおこり戦闘開始。Hercule, Samson, Apollon の活躍、キリスト教陣の脱走者聖 Elfin の色々な体験、生殖の神 *Priape* や色魔 *Satyres* との巡り合等々。精神と物質の大饗宴、天使も聖人も猥せつな行為にさらされる。結局 Jupiter 軍は敗北し、北欧の *Odin* 神のもとに難をさける。そこでオリンポスの主人は三位一体の神となる。天使達はガブリエールによってもたらされた魔法の幻燈の中にコンスタンチヌ帝の継承者以来 *Réforme* までの世界の絵画を眺めて楽しみながらすごす。これは三位一体の三つのペルソナを神学的に不合理とする口実なのである。それから作者はキリスト教史に見られる事件を取り上げては盛んに攻撃して、キリスト教を侮辱している。一方 Jupiter が *Odin* に派遣した *Minerve* は道中で発見した多くの神々について Jupiter に報告する。北欧の神々は皆 Jupiter 軍に加担する。そこで Jupiter と *Odin* の軍神団はキリスト軍の城砦を攻撃する。キリスト軍は奮戦するが敗北する。Jupiter は永遠の父たるイエス・キリストのあごひげを引っぱり引きずり廻す。最後に *Priape* 神が仲裁に

入り、互に天上で争っても無駄であるから戦を止め、協定をし異教の神々もそれに従い、ギリシヤの神々は自分達の安住の地としてパルナッス山上に降りて行く。

作品のごく簡単な荒筋は以上のようなものである。如何に 18 世紀とはいえ、道徳家や信心深いものにとってはあきれて返答も出来ない程のスキャンダルに満ちた作品であった。

Parny は海軍に入ってから世界を巡航し、異国の色々な宗教に接したため、その経験を生かして一大ドラマを作りあげた。実際にドラマ的感覚や登場人物の対話の活気、ドラマの転回のうまさには見るべきものがある。第 9 の歌では日本に関しても述べている。一寸見てみよう。

「日本でも私の望みは裏切られた。日本には猿ばかりいて、猿達がこの国の神々である。そのみにくさに私ははっとした。しかしそれにも馴れたので彼等に挨拶し、彼等の美しさを称えた。最後に私は自分の国民について語った。彼等はだまって聞いている。そして最後にしかめっ面をする。一回舞って、三回とびはね、それからまた威厳をつけた様子に戻り、一番年長者が私に言う。『あなたの不幸に対して我々は全く援助出来ません。そんな暇は一瞬たりともありません。朝から晩まで寺に行かねばなりません。そして夕刻まで祭壇に坐っていなければなりません。それは全く退屈です。眠りに襲れないかと言うのですか？ その時は人にこづかれます。またお経を絶えずくり返し聞かされます。』

18 世紀末に Parny がこのように日本の僧侶の坐禅や読経をスケッチしていることは面白い。Voltaire の東洋思想への関心から Parny も日本に多少憧れていたのであろうが、「*Mon espérance y fut encore trompée,*」*« De leur laideur je fus d'abord frappée. »* には我々日本人も返す言葉がない。

さて、Fontanes の感化で Chateaubriand がキリスト教美学に心を強く向けだして来た点は未開人の物語り「*Atala*」にも見られよう。最初「*Atala*」をキリスト教徒の娘として描く意図が Chateaubriand にあったとは思われない。むしろ Parny の作品「マダカスカル之歌」のようにただ自然の曠野に美しく咲いた若い男女の未開人の恋物語りを書きあげようと思っていたのではなかろうか。それが Fontanes の指導でキリスト教徒の娘の物語りになったと見る方が 18 世紀末の Chateaubriand の思想的立場から考えると妥当に思える。しかもその時期に Parny の「神々の戦」がイギリスにいるエミグレ達の間でも騒がれるようになり、Fontanes も Peltier も憤然とし、Chateaubriand も我慢

出来なくなつて、キリスト教擁護作品を作つて反論することになつたのであろう。もともとブルターニュ人は信仰心が強いところに、母姉の死の悲報もあつたので、Chateaubriand は一気にもとの巢に帰ることが出来たのである。アメリカ大陸の大自然発見と8年に亘るイギリス亡命中に学んだイギリス文芸思想がChateaubriand をして、フランスの18世紀風土から完全に訣別させた。強いては、それが19世紀フランス・ロマン主義の魁となつた。両者の才能の開きは勿論のことながら、そこに Parny の消滅⁷⁾ と Chateaubriand の進展が見られる。

Voltaire の秘蔵弟子であつた Parny は師の反キリスト教的思想を最後まで守り、Chateaubriand の《Les Martyrs》に対する反論として《Christianide》の作成にかかった。即ちキリスト教仮装史で「神々の戦」と対をなすものである。死ぬ前にその断章を《Décade》に発表しはじめたが、帝政が崩壊し王政復古となつたため王朝政府より原稿破棄の約束を命じられ3万フランを受け原稿を焼却している。Parny に Voltaire 程の才能があればフランスロマン主義の開花も多少変つた様相を呈していたかも知れない。

¹⁾ des Forges 或いは Desforges となっている辞典・文献が殆んどであるが、de Forges が正しいとされている。

²⁾ Paris 第2区 F. 12.

³⁾ Exempleaire confidentiel de l'Essai sur les révolutions.

⁴⁾ M^{me} de Frenoy.

⁵⁾ Amable de Baudus 1761-1887年旧法官、早く亡命し、王子軍に加わる。ドイツで《Journal d'Altona, Tableau de la situation, Le Spectateur du Nord》を出版、1802年フランスに帰還。1808年 Murat 王に呼ばれナポリーに行き王子の教育を担当、1814年フランスに帰り、外務省に勤務する。

⁶⁾ Fauche-Borel (Louis) 1762-1829年王党派であつたが、ブルボン王朝の冷たさが彼を投身自殺という惨めな死に追いやった。彼は「回想録」を残している。

⁷⁾ 確かに Parny の *élégies* には19世紀に影響を与えるものがあつた。Parny に愛された弟子の Tissot は師を高く評価し、作品集の編纂もしている。Millevoye も《*Elégies*》論の中で Parny の詩の価値を認めている。Lamartine も Parny の流れを汲んでいる。Musset にも Parny の影がみられる。その他 Mollevant, Labrousse も Parny を手本としている。Chateaubriand も「神々の戦」に対して敵意をもち、正反対の立場をとるが Parny の *élégies* に対しては常にその価値を認めている。Sainte-Beuve も *élégies* に対しては文句なしに称えている。J. J. Weiss も然り、Potez も《*L'Elégies en France avant le romantisme*》の中で2章に亘り詳細に Parny の作品を究明して、

大半は18世紀的みじめな *poèmes légers* に終わっているが《*Poésies érotiques*》と若干の *poésies mêlées* は高く評価し、特に《*Poésies érotiques*》の第4の *élégies* に到って18世紀を脱した詩人の才能の一面を認めている。しかし19世紀の四大詩人の出現によって詩歌は18世紀的擬古典修辭学を完全に脱皮し、人間の精神に直接働きかけるより複雑な、より高度の様相を呈するようになったため、Parnyの詩歌の中にくら良さがあつたとしても *miniature* 的な価値しか認められないとしているが、まさにその通りである。

Parnyは1779年に「神々の戦」を発表した後、19世紀に入りナポレオン時代にも詩作活動は続けている。まず4つの歌からなる《*Isnel et Asléga*》(1802年)はオシアン流の夢想を通してみたスカンジナビア女性の描写である。当時流行の素材ではあつたが、古い歴史に好奇心をおこさせる生気が見られず、ただ筆なれたParnyの文体の優雅さが多少大衆に受けた作品である。

《*Goddam*》(1804年)はイギリス人をオレンジにたとえ悪口と皮肉で彼等をこきおろしている *prologue* 付きの4つの歌からなる。ナポレオンのイギリス征服に協力する作品かも知れないが、浅薄な知識で書かれた詩歌で、俗悪な面だけが出ている極めて凡庸な作品である。

《*Portefeuille volé*》(1805年)は《*Paradis perdu*》と《*Galanteries de la Bible*》と《*les Déguisements de Vénus*》の3篇からなり、最初の2篇は「神々の戦」同様Parnyが好む宗教に対するパロディであり、第3篇の《*les Déguisements de Vénus*》は《*Journée champêtre*》の系列に入る。これまた彼の好きなエロチックな版画セリーである。この3篇はいずれも発刊禁止にあつている。

《*Voyage de Céline*》(1806年)は世界の女性めぐりの旅である。旅行く先々の国で女はどのように取扱われているのか調査するという、これまた冗談とエロティスムを混ぜ合せた俗悪な作品である。

《*Les Rose-Croix*》(1807年)は12の歌からなるParnyの最後の作であるが、作品自体の構成が極めて不完全である。イギリスの中世、フランスのメロヴァン・ガン王朝の事件や人物をとりとめもなく書きつらね、単調で18世紀ばやりの20級の長詩で、歴史や中世に目を向けはじめた19世紀の軌道に乗って進もうとするのであるが、想像力も乏しく、Chateaubriandが《*Les Martyrs*》(1809年)でAugustin Thierryに与えたような読者に *inspiration* を与える過去の再現の興奮、伝説への歓喜と言ったものが全くみられない。精神面に背を向け現実的な18世紀の大半の作家が持つ欠陥即ち精神的深みがなく、想像力も貧困で猥せつと茶化して芸術を毒する欠点Parnyの作品全体をみて感じられる。Parnyの消えた真の理由もそこにあると思う。

貴族出であるParnyはアッシニ紙幣の変動で破産し、生活のため文部省に奉職し細々と暮らしていたが1810年以来病床につき1813年ナポレオンから年金3000フランを受けたものの貧困なまま帝政崩壊の1814年12月5日61歳で他界した。

なお「文芸言語研究」創刊号の文芸篇の「Chateaubriandの詩集 *Tableaux de la Nature* について」の註⁹⁾でParnyの作品年表を書き、ParnyとChateaubriandの関

係は別に論文を予定していると最後に付加えておいたので、この論文でその務をはたしたことにしたい。論文に出て来る他の作家についても文芸言語研究創刊号の註を参照してもらえば、大体理解出来ると思ひ註を省略した。

最後に7頁に訳した《Le Lendemain》の原文を掲げておこう

LE LENDEMAIN

A ÉLÉONORE

Enfin, ma chère Éléonore,
 Tu l'as connu ce péché si charmant,
 Que tu craignais, même en le désirant ;
 En le goûtant, tu le craignais encore.
 Eh bien ! dis-moi : qu'a-t-il donc d'effrayant ?
 Que laisse-t-il après lui dans ton âme ?
 Un léger trouble, un tendre souvenir,
 L'étonnement de sa nouvelle flamme,
 Un doux regret, et surtout un désir.
 Déjà la rose aux lis de ton visage
 Mêle ses brillantes couleurs ;
 Dans tes beaux yeux, à la pudeur sauvage
 Succèdent les molles langueurs,
 Qui de nos plaisirs enchanteurs
 Sont à la fois la suite et le présage.
 Ton sein, doucement agité,
 Avec moins de timidité
 Repousse la gaze légère
 Qu'arrangea la main d'une mère,
 Et que la main du tendre Amour,
 Moins discrète et plus familière,
 Saura déranger à son tour.
 Une agréable rêverie
 Remplace enfin cet enjouement,
 Cette piquante étourderie,
 Qui désespéraient ton amant ;
 Et ton âme plus attendrie
 S'abandonne nonchalamment
 Au délicieux sentiment
 D'une douce mélancolie.
 Ah ! laissons nos tristes censeurs

Traiter de crime impardonnable
Le seul baume pour nos douleurs,
Ce plaisir pur, dont un dieu favorable
Mit le germe dans tous les cœurs.
Ne crois pas à leur imposture.
Leur zèle hypocrite et jaloux
Fait un outrage à la nature :
Non, le crime n'est pas si doux.